

第十二章 初期の出版事業 (二)

一 辞書及び教科書

丸善の出版事業で、最も注意しなければならないのは、早く欧文の書籍の出版が手掛けられたことである。勿論当時の印刷業界や、読者の需要や、その他の一般事情からして、長篇巨冊の出版は、望むべくもないことであるが、たとえ短篇小冊であるにしても、その中には明治の文化史上から、逸することのできないものが存在している。

欧文で発行されたものとしては、まず辞書である。

英和雙解字典 An English and Japanese Dictionary of the English Language. By P. Austin Nuttall

棚橋一郎訳 1885 (明治十八年)

ナットールの Pronouncing English Dictionary は、その語解が簡明であるために、日本の英学界ですこぶる喜ばれた。そのためにこれに日本訳を加えて、即ち雙解として出版されたのが本書である。訳者は古い文学士で、久しく郁文館中学の校長の職にあり、昭和十七年に歿している。その訳語には、一部分は、既出の英和辞書、例えば柴田昌吉と子安峻との共著の「英和字彙」(明治六年刊行) などによっているものもあるが、何といっても、日本に

おける最初の雙解という点に特色がある。翌年には第二版が刊行され、初版にはなかった杉浦重剛、有賀長雄、イーストレキの序文が加えられている。イーストレキのものは英文であるが、訳文も添えてある。二十年の十二月に第五版を発行しているのを見ると、この辞書はよほど当時売行きが盛んであったらしい。

改正増補和英英和語林集成 J. C. Hepburn-A Japanese-English and English-Japanese Dictionary. 3rd. ed, 1886

この辞書は有名なヘボン（平文）の編纂に成るもので、はじめ一八六七年（慶応三年）に、「和英語林集成」A Japanese and English Dictionary; with an English and Japanese Index の名のもとに、上海の American Presbyterian Mission Press で印刷されたもので、幕末から明治の初年にかけて、「ヘボンの字書」として親しまれ、利用されたものである。明治五年に、和英に三千語、英和に五千語を増補し、これに日本文典を付して同じ印刷所から出版された。丸善発行のものは、更にこれを増補した第三版であって、語数は再版本の約二倍に上っている。これには高橋五郎の助力が多かったという。なおホイットニーは、語林集成の語彙の検索に便にするために、漢字索引を作製し、明治二十二年に、丸善から出版している。平文氏著「語林集成漢字索引」Index of Chinese Characters in Hepburn's Dictionary arranged according to their radicals がそれである。

これと別に語林集成の縮少版として、明治二十年に「改正増補英和小辞書」の第二版が丸善から出版されている。この小辞書も、第一版は一八七三年ニューヨークの A. D. F. Randolph & Company から出版されたものであ

るが、第二版以後丸善が出版に当ることとなったものである。第二版は三千部限定で予約販売を行なったものであるが、申込が多いために、途中で予約を締切ったという。この小辞書は、明治四十年に十五版を出しているから、後まで一般に広く行われたことを知ることができる。

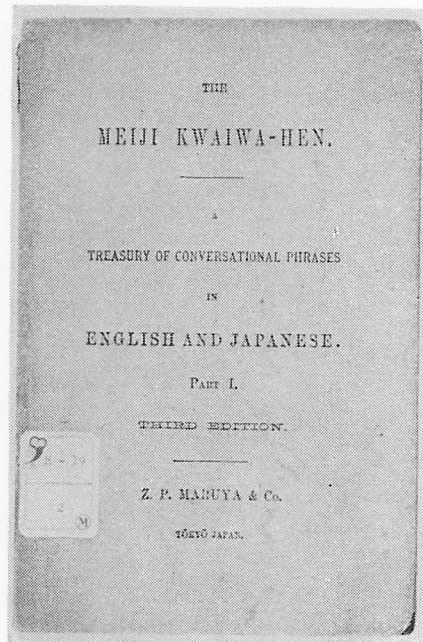
辞書については教科書がある。

Cox-Glimpses of English Literature for Japanese Students. 5 Parts

編者 ロックス (William Douglas Cox, 1844—1905) はロンドンに生れ、一八七六年(明治九年)に、日本に來朝し、駒場の農学校(後の農科大学)の英語の教師となり、明治十二年から東京大学予備門(後の第一高等学校)の授業を担当し、その旁ら共立学校にも教鞭を執った。明治十八年に神田乃武と共に、英語雜誌 *The Student* を創刊し、「外国語雜誌」にも多く寄稿している。本書は表記の通り、日本の学生のために英文学の名作を抜萃して、高等程度の授業の資料としたものである。五部に分け、第一部には *Shakespeare and English Drama* 第二部には *Milton and Epic Poetry* 第三部には *Historians* 第四部には *Classical Fiction: Bunyan, Defoe, Swift* 第五部には *Essayists* を収めている。いずれも古典文学であって、近代文学には全く関係がない。なおその他の、ロックスが編纂したもので、丸善から発行した教科書関係の書物には、左の如きものがある。

Cox's Grammar of English Language for Japanese Students. 2 vols. (ロックス英文典)

Cox's Aids to English Composition and Translation for Japanese Students (英語作文便覧)



Meiji Kwaiwa-Hen

Cox's The Principles of Rhetoric and English Composition (修辭及び作文要旨)
 Cox's Primer (初学読本)
 Cox's First Reader (第一読本)
 文部省の教科書の検定は、この頃からあったので、文典及び読本は、いずれも検定を受けている。

Meiji Kwaiwa-Hen; A Treasury of Conversational Phrases in English and Japanese.

nese. 3 Parts, 228 pp., 1885—86

著者は村松守義である。巻之一は会話之部で、最初に英語の単語を、次に動詞 to have, to be の変化、数詞以下各種の語彙を挙げ、更に各種の感情の表現を記し、これに日本語の訳文をローマ字で右側に対応させている。訳文はかなり幼稚である。そのあとに簡単な日用会話がある。巻之二は会話及尺牘之部で、書簡文の文例があったらしいが、いま失われている。巻之三は文格変例之部で、存在、関係、数、時、変化、運動、音、光、その他の概念を表わす各種の語彙を集めて、その差異を説明したものである。勿論基づいた書物があつたに違いないが、どちらかといえば、会話書というよりはむしろ文法書的なところがある。島田三郎とイーストレイキの序文があるが、前

者の中に

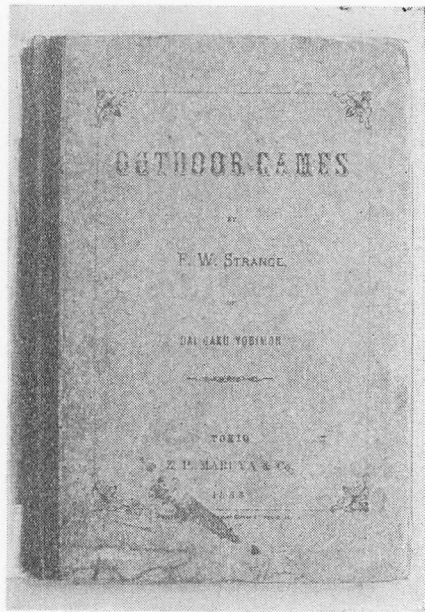
「第一 単語より初めて短句に及び漸く繁密の談話に入れり。第二 主として外人に対話する普通の事項を挙げり。第三 専ら普通の俗語用法を採れり。第四 普通の書牘及び物品領収証書等を篇尾に附せり。能く此書に熟せば尋常対話通信の用を弁ずるを得べし。嗚呼此書の如き亦語学の利器と評すべき者なる耶」という言葉がある。当時相当に広く用いられたものらしい。

一 ストレンジの「戸外競技」

F. W. Strange-Outdoor Games. v+55 pp, 1883

著者ストレレンジ（一八五四—一八八九）は、イギリス人である。一八七五年（明治八年）に、当時の東京英語学校（東京外国語学校から分離改称し明治十年大学予備門となる）の英語の教師として赴任し、引き続き大学予備門の御雇教師となった。彼が日本に來朝したのはその二十二歳の時で、殊にイートン校の出身であったから、スポーツについては充分な興味と素養を持っていた。彼は自分の教える学生たちが、殆ど戸外遊戲の知識がないことを知って、これを開發することを志した。彼は彼自身隅田川でボートを漕ぎ、田舎道でランニングを試み、おのずから徐々に学生たちのスポーツに対する関心を高めることに力めた。この目的によって書かれたのが本書である。

本書は本文わずかに五五頁の小冊子である。その緒言に「日本の学生が、知能的訓練に充分であることは疑われないが、体育的訓練には充分であるとは言ひ得ない」とあるので、その主意とするところが明らかである。本文は



Strange-Outdoor Games

論であるが、蹴球・野球・テニスなどを日本に紹介したものとしては、本書はこの点からも、極めて珍重すべきものである。

本書の出版された明治十六年に、ストレンジの指導によって、東京大学三学部と予備門の合同の陸上運動会が、当時まだ一橋にあった大学の運動場で開かれた。予備門校長の杉浦重剛も、先頭に立って準備を指揮し、抛彈（砲丸投げ）に用いる砲丸がないために、砲兵工廠へ行ってこれを求め、ハードル競技には、寄宿舎の椅子を持ち出して、これに宛てたという。教授であった菊池大麓や穂積陳重も競技の審判に当り、優勝者には洋書が与えられた。これは毎年の例となったようである。編者の見た本書は、現在後樂園の野球体育博物館の所蔵のものであるが、もと山

三十四節に分れ、はじめに徒手遊戲（ブリズナー・ベース、ウォーニング、タッチ、リープ・フロッグなど）を説明し、次にボール競技（ホッケー、フットボール、ローン・テニス、ベースボール）を説明し、更にその次に短距離・中距離のランニング、幅飛び、三段飛び、棒高飛び、二人三脚、クリケット、ハンマー投げなどについて述べ、最後に練習と、競技の禁止規定について説明している。勿論極めて簡単な記述であるから、不十分な点が多いことは勿

口高等商業学校（現在の山口大学経済学部の前身）校長であった横地石太郎氏の旧蔵である。そして横地氏は本書の裏表紙の裏面に、運動会の賞品として授与されたものと記しているのは、実に珍しい。

なお明治十八年に、下村泰大の編輯で、「西洋戸外遊戯法」という書物が、泰盛館蔵版として出版されている。丸善も発売所になっている。この書はその凡例に「諸書ヲ参酌折衷シテ抄訳輯録セシモノナリ」とあるが、事實は殆ど全たくストレンジの書物の翻譯である。ただその書物の中で、フットボールを「蹴鞠」、ベースボールを「打球おにごっこの一種」、ローン・テニスを「球打ち」、ハードルを「越籬競走」などと訳しているのは、訳語の歴史から見て、興味の深いものがある。

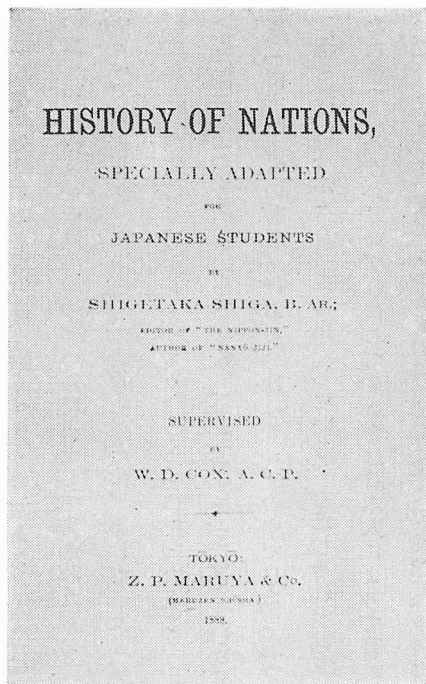
三 志賀重昂の「世界史」と

ディキンズの「忠臣蔵」

Shigetaka Shiga-History of Nations.

689 pp., 1888

本書は志賀重昂が、「南洋時事」を著わした翌年に、英文で著した世界史である。この著作については、前記のコックスの協力があったが、わずかに二十五歳の青年でこれを公



志賀重昂著「世界史」

けにした、その才能と努力は、驚くべきものである。本書は副題に *for Japanese Students* とある通り、当時の高等中学校（後の高等学校）の教科書として書かれたものである。その内容は、序論、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、大洋洲と地域的に分たれ、通じて一九五章ある。その記述の体裁は、パーレーの万国史によく似ており、内容にもパーレーやスウィントンに拠ったところが多い。しかし大洋洲の記述については、*History of Australia; Hawaiian Almanac; Hand-Book of New Zealand* などを参考しており、やや異彩を放っているのは、「南洋時事」の著者だけある。殊にアジアの中で日本に關する九章は、さすがに日本人の著述として、色刷の地図二葉を挿んで、かなり詳細に記述している。ただしそれが武家時代に詳しいのは、あるいは「日本外史」などに拠ったためであろうか。いずれにしても本書は日本人によって書かれた世界史としてだけでなく、コックスが序文で言っているように、「英文としても相当の出来栄であって、教科書として使用するに堪えることも注意すべきであろう。

Chushingura; or the Loyal League translated by F. V. Dickins, 227 pp., 1892

A Japanese Romance という副題がある。秀英舎の印刷である。題名の如く、「仮名手本忠臣蔵」を訳したものである。勿論かなり大幅な意訳も省略もある。八段目の戸無瀬と小浪の道行などは、全部省いてある。その代り五〇頁に互る付録があつて、忠臣蔵の歴史的事実や、文中のヨーロッパ人に解しがたい名辞について説明が加えてある。勿論現在から見て、不備また不穿鑿な点が多いのは已むを得ない。全体赤穂浪士の復讐の事蹟は、早くからヨーロッパ人に知られ、為永春水の「伊呂波文庫」のフランス訳などもある。本書もその類の一つに数えるべきで

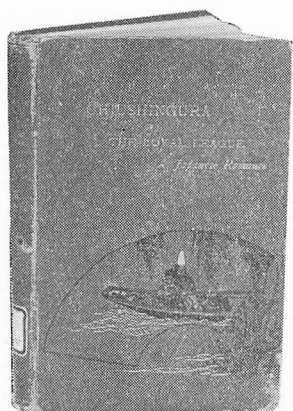
あろう。なお本書には尾形月耕の筆になる木版色刷の挿絵が十葉あるが、軽妙な筆致で面白い。

W. Imbrie-Handbook of English-Japanese Etymology. viii+287 pp., 1889

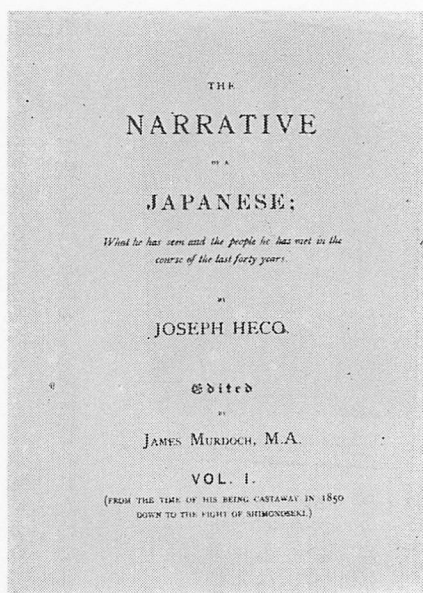
著者インブリーはアメリカの宣教師で、一八七五年に日本に渡来し、明治学院神学部教授として、日本の英語教育に大きい功績があった。本書の初版は一八八〇年、横浜のケリー商会 (Kelly & Co.) から発行されている。本書はエチモロジーとは題しているが、実は日本語をヨーロッパの言語学的に、動詞、名詞、形容詞、副詞、数詞、後置詞、接続詞等の各品詞に分類して、これを文法的に説明したものである。そして同時にこれを英語に対応させて、多くの例文を挙げているから、ある意味においてはまた和文英訳の例題集でもあった。そのためにこの書物は、教科書として広く高等程度の諸学校に行われたのである。

四 ジョセフ・ヒコの自叙伝

丸善刊行の欧文書籍を挙げると、やや後になるが、浜田彦蔵すなわち有名なジョセフ・ヒコ (Joseph Heco) の自叙伝を逸するわけに行かない。本書は *The Narrative of a Japanese* と題し、What he has seen and the people he has met in the course of the last forty years とふう副題がある。上下二巻に分れ、上巻は序文三頁、



Dickins-Chiushingura



Joseph Heco-The Narrative
of a Japanese

本文三四六頁、下巻は本文二五四頁、附録八頁がある。下巻の奥付に明治二十八年五月十日発行、発行兼版權所有者浜田吉、発行所丸善株式会社、印刷所横浜ジャパンガゼット新聞社、印刷人田中為次郎、定価三円とある。上巻には奥付を欠いていて、発行年月は不明であるが、高市慶雄氏は、恐らく明治二十五年中のことであろうと推定されている。

本書はジョセフ・ヒコの日記八冊の中から、有名な日本史の学者であったジェームズ・マードック

(J. Murdoch, 1856—1921) が、選択して編纂したものである。周知の通りヒコすなわち彦蔵は、播磨加古郡阿閉村^{あへ}（現在の播磨町古宮）に生れ、十四歳の時（嘉永四年・一八五一年）新造船栄力丸に乗って、江戸から西下の途中、遠州灘で暴風に遭い、漸くアメリカ船オークランド号に救助された。ヒコはサン・フランシスコで税関長サnderに認められて、その保護を受け、ボルチモアで学業を修め、また洗礼を受け、ついに一八五八年合衆国に帰化して、その市民となった。

一八五九年、ヒコは駐日公使ハリスと共に神奈川に入港し、絶えて久しい故国に上陸した。以来ヒコは神奈川の領事館にあって、日米両国間の折衝に当った。一八六〇年二月一旦領事館を辞任して、アメリカに帰ったが、一八

六二年十月また再任された。しかし間もなく再度これを辞した。彼が日本最初の新聞紙である「海外新聞」(一八六四乃至六五年)を発行して、文化史上に功績を残したのはこの頃である。以来彼は長崎に赴いて、明治初年の貿易上の問題について、斡旋するところが多かった。その後彼は長崎を去って神戸に赴き、明治二十一年に東京に移住して、晩年の生活を送った。その歿したのは明治三十年十二月のことである。

本書の記事は、ヒコの誕生にはじまり、明治二十四年の濃尾の大震災に終っている。その文章は立派な英文であって、校訂者マードックも修正する余地がなかったという。文中漂流の記事は十四歳の少年の記憶としては、非常に確実である。彼は日本人としてはじめて、合衆国大統領ピアース(F. Pierce)に謁見し、更に後にブッキャナン(J. Buchanan)及びリンカーン(A. Lincoln)に謁見しているが、その印象を伝えたものは、いずれも興味が深い。彼が神奈川に上陸して、絶えて久しい故国の土を踏んだ時、その兄が弟の帰還の噂を聞いて横浜に赴きヒコと再会する記事は、感動に溢れている。領事館の通事としては、日米両国間の多くの折衝に当ったから、明治初年に長州藩の顧問となった時代と共に、多くの外交資料を供給する。実にこの書物は、極めて変化の多い人生を経過した人物の回顧録であると共に、また激動の時代を側面から記録した文化史といふべきものである。

本書は岡繁樹によってサンフランシスコで原本が複製された。そしてその上巻だけは、後の日本銀行総裁土方久徴が学生時代に翻訳して、「漂流異譚開國之滴」の題名の下に、明治二十六年に博聞社から刊行された。但しこの書は日本人にあまり興味がないと思われる部分は省略されていて、完訳ではない。そして惜しいことには、藤島長敏の訳した下巻は遂に公けにされなかった。昭和七年に高市慶雄氏は、上下巻を併せて修正を加え、更に詳細な解

題を加えて、「開国逸史アメリカ彦蔵自叙伝」の名で、ぐろりや・そさえてから刊行した。最近には、また平凡社の「東洋文庫」にも収められている。

五 欧文の翻刻書

注意すべきことは、欧文で出版された書物の中に多くの翻刻書が含まれていることである。翻刻書は勿論その殆どすべてが原著者と無関係に刊行されたものである。しかし国際的に著作権を保護するベルヌ条約が締結されたのは、一八八六年（明治十九年）であって、日本がこれに加盟したのは、更に遅れること十三年の一八九九年（明治三十二年）であるから、勿論海賊版（pirate edition）とすべきものではない。

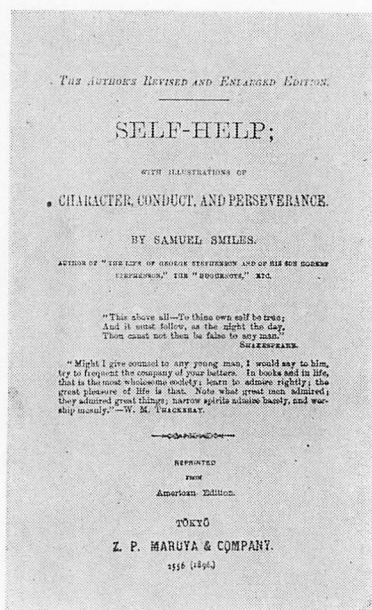
元来翻刻というものは、その需要が多いにも拘わらず、原著を入手することが困難であるか、あるいは高価であるかによって、行われるものであるから、翻刻が行われること自体、その書物が原書としても、輸入が多かったことを認めなければならない。この点からも輸入書籍のリストの不備を補なう上で、翻刻書には重要な意味がある。こうした事情から、最も翻刻の多かったものは、やはり英語の文法書（grammar）及び読本（reader）であった。特にこの中で明治初期を代表するものはナショナル・リーダーと、ユニオン・リーダーであった。ナショナルは第一から第五まで行われ、ユニオンはやはり第一から第五まであったが、第四読本が最も行われた。明治十五年八月七日に翻刻届となっているユニオン第四リーダーは、翻刻人は岡本直吉となっているが、売捌人は丸善であって、恐らく丸善の出版であろうと思われる。

リーダー以外で、若干の注意すべき翻刻書を挙げると、次のようなものがある。

S. Smiles-Self-Help. 449 pp, 1885

この書物はその分量からすればさほどでもないが、しかもこれほど明治初年の、否明治全期を通じて、日本人に影響を与えたものは稀であろう。それだけにまたこの書について、多く筆を費やす必要はあるまい。著者スマイルス（一八一二—一九〇四）は、スコットランド出身の伝記作者であるが、彼自身その自伝で言っているように、清教徒の伝統を引いて、自立自助の精神に富む苦学力行の人物であって、その著述は、いずれも事実立脚して、人を動かすこと大なるものがあつた。特にこの「自助論」は、商工業に努力した多くの先人の事蹟を通して、最も實際的に自主自由の気象、職業の神聖感、誠実、勤勉の美德を説いた点で、善き意味における資本主義的モラルの教科書であつた。この書物がはじめて刊行されたのは一八五九年であるが、それから十九世紀の間に十七カ国語に翻訳されたというのは、偶然ではない。

実をいえば、日本でもこの書物が広く読まれ、その翻刻が行われるようになったのは、中村敬宇（正直）（一八三二—一八九一）の訳した「西国立志篇」が、広く流布したからであるともいえよう。はじめに述べたように、中村正直は慶応二年に幕府がイギリスに留学生を派遣した折に、その監督として同行したのであるが、その地でイギリス人の自主独立の社会の実態に接して、大いに感動し、ここに近代ヨーロッパの理想を発見した。彼は帰朝の際友人のフリーランドからこの書を餞別として贈られ、その理想と実態とを説いたものとして愛読して、その半を暗



Smiles-Self-Help

誦するに至ったという。帰朝後静岡で教育者としての生活に入ると共に、落魄した旧幕臣に再起の力を与えようとしてこの書の翻譯に志し、明治三年に至って完成して、その年から翌年にかけて、十一冊の刻本として、木下謙一郎の蔵板で出版された。敬字は文章家であったから、訳文は平明暢達であって、それがまた一般の人々がこの書物を歓迎する大きい理由となった。その初刊本は出版部数十万を越え、

その後出版された活版本を加えると百万部に達したであろうという。なおその後大正年代まで「自助論」の名によって、多くの訳本が公けにされたことはない。

S. Smiles-Selbst ist der Mann: Charakterskizzen und Lebensbilder. vi+474 pp., 1885

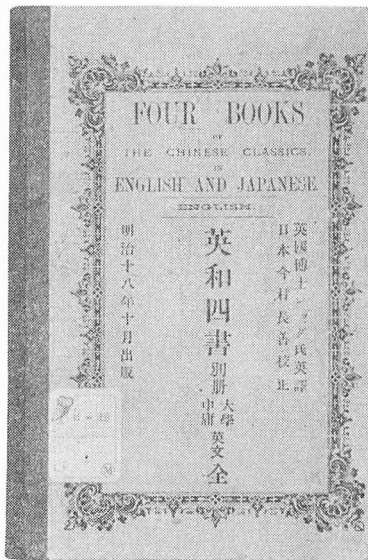
前者のドイツ語版である。その序文に「自助論」の成りたちが書いてある。それによると、イギリス北部のある都市で、数名の貧しい青年によって作られた教養の集いが、次第にメンバーが多くなって、もと避病院代りに使用された一部屋を借り受けて、いろいろの科目の授業をするようになった。スマイルスは、この集いに講演に招かれ、彼等の自助の精神に感動し、これを援助するために他の人々の実例を引いて、誠実な義務の遂行が、それらの人々

の後年の幸福を齎らしたことを語った。後年この集いの中の一人が著者をたずねて、その成功が著者の講演に基づくことが多かったと感謝するに及んで、著者は更に多くの実例を求めて、自助の人物のスケッチを広く世の人々に示そうとする考えを起したのである。

このドイツ語訳は、すべて著者スマイルス自身の筆に成っていて、そのためにすこぶる英文調を帯びている。そこに特色があつて面白いが、しかしドイツ語の教科書としては、必ずしも適當ではなかったかも知れない。

Four Books of the Chinese Classics translated into English by James Legge and revised and translated into Japanese by N. Imamura. English-separate volume; The Great Learning the Doc-

trine of the Mean. Tokio, 1885



Legge-Four Books of the Chinese Classics

レッジ (J. Legge, 1815—1897) が四書を英訳したものの中から、大学と中庸とを抜萃した小冊である。久しく中国に宣教師として駐在し、それと共に中国の古典に精通したレッジの盛名は、あらためていうまでもない。四書がまだ一般に教科として用いられていた当時としては、その英訳を英語の教科書として使用することは、案外に便宜が多かったものであらう。